

## Book Review 14-2 数学 屈辱の数学史

毎週 NHK で、興味深い数学の番組を流している。コメディアンのパンサー尾形貴弘が難解な数学の世界を大真面目に解説する。天才数学者をも苦しめてきた数々の難問を、1回30分ワンテーマで分かりやすく掘り下げる。「a b c 予想」「暗号理論」「虚数」等が興味深かった。「a b c 予想」では、掛け算は予測ができるが、足し算が絡むと予測が難しいので、足し算を含む式から予想ができることは数学的には飛躍的な進歩となるのだ。これを京都大学の望月教授が、「宇宙際タイヒミュラー理論」という新しい理論を構築して証明したのだが、普通の数学者くらいでは理解できないらしい。

そんな折、新聞で紹介されていた『屈辱の数学史』（マット・パーカー著）を読んでみた。著者はオーストラリア出身の元数学教師。数学とスタンダップ・コメディの両者を同時にこなす。テレビやラジオに出演して数学について話す他、ユーチューバーとしても活躍しているらしい。

本書の原題は、「喜劇だよ、数学の間違えは」である。本書では数学のミスによる喜劇的な事例を多く取り上げている。時刻やカレンダーに潜む問題点。共振で鳴り響く橋などの工学的なミス。Excel で小数点を扱うときの問題。歯車の噛み合わせ。確率の適用の問題点（コインの表裏・宝くじ必勝法）。相関関係と因果関係。ロボットはランダムを作れるか、擬似乱数発生アルゴリズム、等々。英国「サンデー・タイムズ」紙に掲載された数学本初のベスト・セラーである。